

## 日本の家畜の起源と古代人の動物感

メモ)鉄本 2022.09.14

「魏志倭人伝」に倭国には牛・馬・豹・羊・鶻(かささぎ)はいないとあります。日本の家畜はいつ頃どのような形で日本に入ってきたのでしょうか。古代人と動物の関係性について、埴輪に表れる動物を中心にまとめました。

### 1. 日本の家畜の起源(出土の最古例)

	縄文時代	弥生時代	古墳時代	飛鳥時代以降
犬	【縄文犬】=小中型犬 縄文早期の上黒岩岩陰遺跡(愛媛)、夏島貝塚(横須賀)から出土。  東南アジアから縄文人と共に移入。	【弥生犬】=小型犬 黄河・揚子江流域から稲作と共に移入。	<b>【縄文犬・弥生犬の特徴】</b> ・体高:35~40cm ・縄文犬はストップ(鼻面上の段)がないが、弥生犬には少し表れる。	
猫	出土例なし	カラカミ遺跡(壱岐)から1体分出土。		文献史料:光明皇后が飼育。 観音寺遺跡(徳島)から1体分出土。
鶏	出土例なし	カラカミ遺跡(壱岐)等北部九州から多数出土。  朝日遺跡(愛知)からチャボサイズの骨が出土。	形象埴輪として最も早く現れる。	
猪・豚	縄文前期の伊豆諸島で食糧とされた猪の骨が出土。  縄文前期の倉輪遺跡(八丈島)から飼育・小型化された猪の骨が出土。	【弥生ブタ】桑苗遺跡(大分)から家畜化された猪類の頭部の骨が出土。  渡来人と共に中国大陸から豚が移入。	野生の猪が生息しない伊豆諸島や八丈島の縄文遺跡で猪の骨や土製品が出土していることから飼育が行われていたことが推測される。	
馬	出土例なし	出土例なし	古墳前期の塩部遺跡(甲府)から上下顎歯が出土。	
牛	出土例なし	出土例なし	南郷遺跡(御所市)から出土。 中国の黄牛と同系	
山羊・羊	出土例なし	出土例なし	出土例なし	文献史料:「日本書紀」推古7年条に百済が羊2頭献上の記載

(注)出土の最古時期を挙げているが、土製品などから実際の起源は出土の時代より遡ることが推測される。

## 2. 古代における人と動物の関係性

### (1) 犬

【縄文時代】 人骨と共に墓域を形成。狩猟用として大切に飼育。

【弥生時代】 大陸から豚と同様に犬を食べる習慣が伝来。

【古墳時代】 弥生犬が各地に広がる。支配層が狩猟用、愛玩用に飼育。

「播磨国風土記」に応神天皇がシロという犬を伴ったという記述がある。

【飛鳥以降】 遣唐使が中国から大型犬も移入。「枕草子」第九段に「翁丸」という名の犬の記述がある。犬を食べる習慣は幕末まで継続した。

### (2) 猫

【飛鳥以降】 愛玩用としてのみ出現。「源氏物語」、「更科日記」などに登場。

右の図は、「石山寺縁起絵巻」第2巻(鎌倉時代末期)に描かれた猫。紐でつながれている。

(出典: 国立国会図書館デジタルコレクション)



### (3) 鶏

【縄文時代】 遺跡からの出土例は無い。鳥類で一番多いものはカモ類で全体の29.3%占める。

【弥生時代】 出土は少なく全体の僅か3%。カモ類は43%占める。弥生遺跡から出土する骨は小型で現在のチャボ程度。遺跡から出土するケースは少なく、1集落に数羽程度と考えられ、食用というより、時告げ鳥だったと思われる。

【古墳時代】 古墳末期には食することの禁止勅令が出されており、ある程度食されていたことが判る。

【飛鳥以降】 古代には占いとしての闘鶏が行われたが次第に娯楽的要素が強くなる。江戸時代には多量の鶏・卵が食された。

### (4) 猪・豚

【縄文時代】 家畜化された野猪が飼育され食された。埋葬例も存在(千葉市下太田貝塚など)

【弥生時代】 用途は食用で、繁殖を目的にした本格的な飼育が行われた。

【古墳時代】 猪養部によって豚を飼育。(古代では猪という文字は豚を表す)

【飛鳥以降】 仏教の影響により豚肉食・豚飼育の禁止が広がり、表面上は見られなくなる。一方で、「もみじ」、「ぼたん」などの名称で鹿、猪の肉が食された。

### (5) 馬

【古墳時代】 利用法: 乗用馬、荷駄馬、儀仗用(駒牽)

馬の遺体の3つの様相: 食用としての馬、工芸品への利用、呪術的な犠牲馬

馬マツリ(犠牲馬): 「雨乞い」(「降水祈願」、「止水祈願」) 雨は黒馬、晴は白馬を奉納。

馬は神霊の乗る動物として神聖視し、疫病退散等のため「生き馬奉納」が行われた。

⇒後に、形代としての土馬に変化していく。

【飛鳥以降】 利用法: 乗用馬、荷駄馬、軍用馬(調教・馬術)、騎芸(犬追物、流鏝馬、競馬)

文武天皇期に牧の制度化(大宝令): 官馬の飼育・徴発権限、牧の管理者(牧長、牧帳)

平安時代の牧の分類: 「諸国牧」= 兵部省所管の牧(計28牧)、「御牧 or 御料牧」= 皇室御料牧(東国に32牧)、「近都牧」= 京都近郊の6牧(地方から貢進された馬の放牧場)

(6)牛

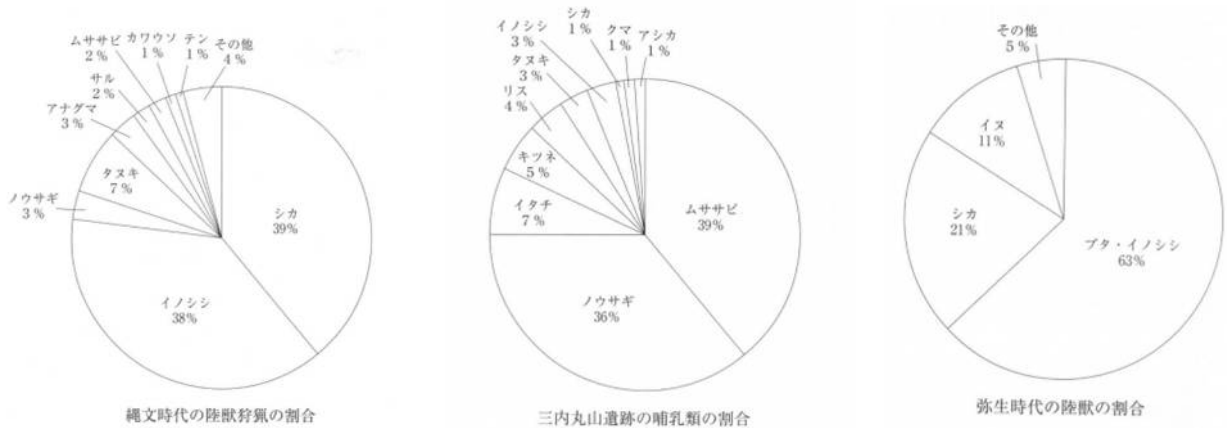
【古墳時代】 利用法： 食用(肉、乳製品)、農耕用、荷役用、皮革用、櫛など小物

【飛鳥以降】 利用法： 上記に加え、牛車による輸送手段、鎧の小札

肉食禁止令以降は、農耕用、荷役用に限定される。

(7)家畜外の動物

- ① ムササビ 縄文遺跡の三内丸山遺跡からは大量のムササビの骨(全体の39%)が出土している。  
毛皮が防寒用に優れているため、古代人の衣類の材料となったと思われる。  
古墳時代人は、ムササビの飛翔行動に超能力を感じ呪術的なものを感じていた可能性。
- ② 野うさぎ 危険ではなく捕獲しやすい動物であるので縄文時代早期の遺跡から出土している。  
三内丸山遺跡ではムササビに次いで多数(全体の36%)出土している。
- ③ 鹿 猪と同様に縄文時代から主要な狩猟獣であった。後頭部のみが切断され焼かれた状態で出土する例が見られ、何らかの儀礼が行われたことが想像できる。土製品は作られておらず、また、飼育の形跡もないため、猪・豚とは異なった扱いを受けていた。鹿角から釣り針、銚先、針、装飾品など多くの製品が作られた。



出典：「事典 人と動物の考古学」西本豊弘/新美倫子編 吉川弘文館

3. 埴輪に表れた動物と古代人の動物感

- (1)鹿 水内古墳(京都)の円筒埴輪:雄鹿と矢を放つ狩人の線刻画「王の狩り」  
画の意味=地霊の象徴である鹿を王が狩ることにより、その生命力を自分に吸収する「魂振り」  
他に、塚山西古墳(栃木)、太子塚古墳(群馬)の鹿形埴輪、
- (2)猪 猪の剛強さから霊獣として、それを狩ることにより猪の生命力を得る「王の狩り」  
保渡田VII遺跡(群馬)の猪形埴輪、尾ノ上古墳(広島)の円筒埴輪
- (3)鳥 鶏は「夜と朝」、「闇と光」、「他界と此界」の境に立つ動物と観念=「天の岩戸伝説」との関連  
ト리는魂を他界へ誘う存在として観念 鶏形埴輪、トリ形木製品、津堂城山古墳の水鳥形埴輪など

【参考文献】 ・「事典 人と動物の考古学」西本豊弘/新美倫子編 吉川弘文館 2010

・「人と動物の日本史 1」動物の考古学 西本豊弘編 吉川弘文館 2008

・「人と動物の日本史 4」信仰の中の動物たち 中村生雄/三浦佑之 吉川弘文館 2009

・「古墳と水のマツリ」より「馬のマツリ」 近つ飛鳥博物館図録